

少人数単位の2年次一，3年次一各学年セミナーにおける 双方向教育のメリハリ分析

山岡 萬謙・山本 健治*

倉敷芸術科学大学教養学部，*産業科学技術学部

(1999年9月30日 受理)

1. はじめに

セミナーは講義の形式をとらない教育形態として，わが国における学部教育に定着した感がある。「大学教育学会」の調査によると¹⁾，約90%近くの大学で何らかの方法により少人数セミナーが行われている。その少人数指導の持味をうまく引き出せば，講義にはない大きな教育効果が期待できるとも考えられている（図1参照）。以下，セミナーをゼミと略称する。本学教養学部においても，学年ごとの必修ゼミとして教養ゼミ（1年次），2年次ゼミ，3年次ゼミ，および特別研究（4年次）が実施されている。大部分のゼミでは，1名の担当教員が学生を数名受け持っている。構成メンバーが10数名以上になるようなことはあまり起きていない。それゆえ，多くは一斉指導にはない個別指導ならではの特徴をもっていると考えられる。実際のところ，このような学年一区切りの少人数ゼミの長所とは何であろうか。どのような工夫が良い方向に働き，大きな学習効果をあげることができるのだろうか。そのあたりを学生たちの生の声をもとに考え，学際的意義も含めてゼミに関する観点を検討したい。学部における少人数構成の教育的活動について，的確な状況判断に到達することができればと考えている。

2. 中間学年ゼミの状況調査結果

さて，4年間一貫して実施されている学年ゼミの中から，「中間学年ゼミ」—2年次ゼミと3年次ゼミ—に的を絞って考察した。その意図について説明しなければならない。

「中間学年ゼミ」には，学生の将来を見据えながら教員と学生の双方から相手に対して意志の摺り合わせを働きかけやすい，という特徴があると思われる。教員個人の裁量で行われてよいとされるゼミで，そのような長所が生かされているかどうか，大いに興味のあるテーマである²⁾。他方，4年次の特別研究では，そういった流動性は生かすべくもない。総仕上げのゼミでは，もっぱら卒業研究をすすめるために学生と教員個人の特性を生かすことが優先される。そこには“次の学年へ向けて”という観点はほとんどない。また，1年次の教養ゼミはすべて同一の授業計画（シラバス）に則って実施されている。中間学年ゼミを考察・分析の対象とした理由はここにある。分析を試みた事柄について，少

していねいに別の角度から述べるところである。筆者を含めて多くの教員は、学年ゼミは大変だけれども、その割には何とかうまくやっているという実感をもっている。その一方で、教養ゼミや「中間学年ゼミ」について否定的な声も時々聞かれる。よく訊いてみれば、ゼミの意義を疑ってのことではないと分かるのだが、しかし授業数とのバランスから、いつ何ときゼミの存在自体が危うくなっても不思議ではない。大きな問題もなく4年間で過ぎた背景にはどのような理由があるのか、これも考えておくに越したことはない。教員の強力な牽引力に学生がついて来たのか、それとも、良い意味での双方向からの歩み寄りが功を奏していたのか、それとも、一方または双方が我慢していたので問題点が見えなかっただけなのか。いずれが本当であるかによって、完成年次を過ぎた今からのゼミの質は大きく変わってくる。実際のところは、いずれか複数の傾向が関係しているものと予想される。

平成11年度の中間学年ゼミ実施の概要を表1にまとめた。その他の資料と合わせて検討したい。なお、教養学部では学生自身が次年度の中間学年ゼミ（さらに特別研究）を選択する方式がとられている。各年度、後期タームの終わりごろに設けられた一定の期限内に履修申請の手続きがなされる。

平成11年度の2年次ゼミの学生総数は126名、担当教員数は22名であった。同様に3年次ゼミでは、それぞれ148名、38名であった。2年次ゼミと3年次ゼミの各担当教員は、それぞれ1人当たりで平均して5.7名と3.9名の学生を受け持ったことになる。なかには学生1名だけの最小単位のゼミがあったし、その反面、多いところでは（頻度は極めて低い

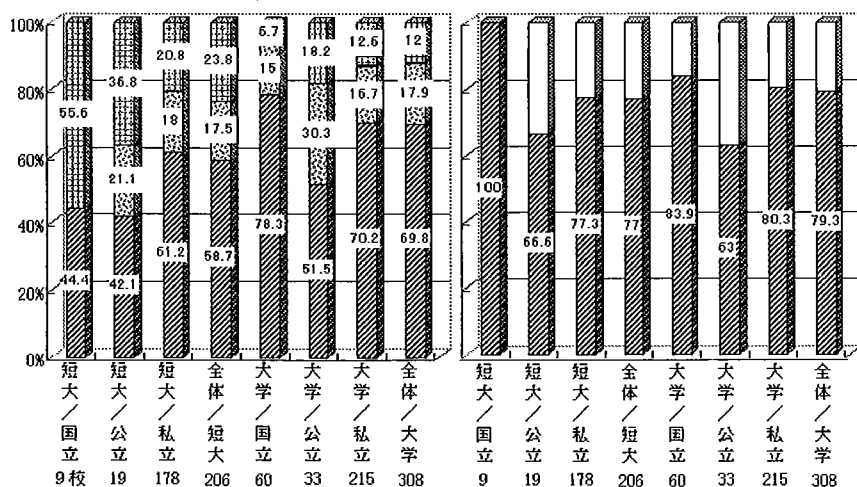


図1-a 少人数クラスやセミナー形式の授業の実態

図1-b 実施されている中で「効果があつた」と回答された割合 (■ 効果があつた)

図1 大学種別にみる「小人数クラス」や「セミナー形式の授業」の実態¹⁾

が) 19名, 15名, 12名, ……などの大所帯もあって、やや志望分野の偏重傾向がみられた。しかし学生にしてみれば、個人的興味はもちろんのこと、教員の専門分野や人物、または他の不確実さなどの影響も受けて、志望選択を申請しているようであった。2年次ゼミと3年次ゼミを担当した各教員の専門分野の内訳は、それぞれ、A－人文科学・教育等が9名と15名、B－社会科学が7名と7名（B－分野だけは同一教員）、そしてC－自然科学・保健等が6名と16名であった。ちなみに筆者の山岡はA－分野、山本はC－分野を担当している。学生数を見ると、A－分野かB－分野を選択した者の割合は2年次ゼミでは74%であったのが3年次ゼミでは58%と減少傾向、反対にC－分野の選択履修者は同順で26%から42%へと増加傾向にあった。（このまま最高学年に進むかどうかは年度末の調査を待たねば結論できないが、これは現在の大体の傾向を反映した数値である。）教員1人に対するゼミ学生数の平均密度を調べて見ると、2年次ではA・B－分野のゼミ5.8に対してC－分野のゼミが5.5、また3年次でもA・B－分野の3.9に対してC－分野が3.9というふうに、年次での違いはあるものの分野による違いは見られなかった（図2）。調査した1999年度のゼミ担当教員は、2年次から3年次にかけてA－分野に6名が、C－分野にも10名がそれぞれ増員されていた。学生の側でも、あらためて研究分野と教員を選択しなおすので様子が変わっている。上記の“不確実性”にも関係するが、ここで当学部の

表1 平成11年度中間学年ゼミ一覧表（2年次ゼミ、3年次ゼミ）

学問上の分類	(A)		(B)		(C)	
	人文科学・教育等		社会科学		自然科学・保健等	
年次	2年次ゼミ	3年次ゼミ	2年次ゼミ	3年次ゼミ	2年次ゼミ	3年次ゼミ
学生数	54人(43%)	53人(36%)	39人(31%)	33人(22%)	33人(26%)	62人(42%)
教員数	9人	15人	7人	7人	6人	16人
密度	6.0	3.5	5.6	4.7	5.5	3.9

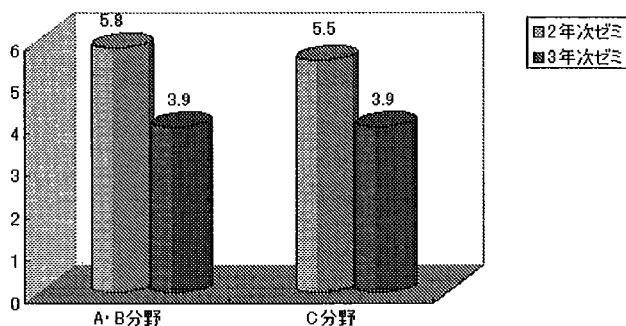


図2 セミナー人口密度 [学生数/担当教員数]

めざしている教育研究はいずれも、多かれ少なかれ学際分野につながる傾向を有することを明記しておきたい。つまり、高校生の感覚ではAとBが文系でCが理系であったかもしれないが、本学の教育体制のもとで考える際には、受験制度のなごりに固執することは適切さを欠くことになる。ただし、学生がある理由をもって幾つかの研究室を遍歴したことは尊重されるべきであろう。

3. 教員と学生の“ほどよい”関係

ここに教養学部2, 3年次生が“ゼミをどのように考えているか”を象徴するようなグラフがある³⁾ (図3)。いま現在の実態がグラフから明瞭に浮かび上がってくる。これを見て英語で表現すると“フランクに云えば—”となるところだが、正直ゼミ活動の意義を実感する。大学教育のあり方に関しては、最近の「大学教育学会」でも大きな議論がなされた。教育活動に対する正当な評価がなされるようにならない限り、教育熱心な大学教員は増えない、という受けとめ方もあるという。たしかにシンポジウム⁴⁾での討論は『教育活動に打ち込んで論文数は増えない、授業の工夫に時間をさく教員は損をする、教育よりも自分の専門の研究……』との本音で生きる大学人の存在を思い知らせる部分もあった

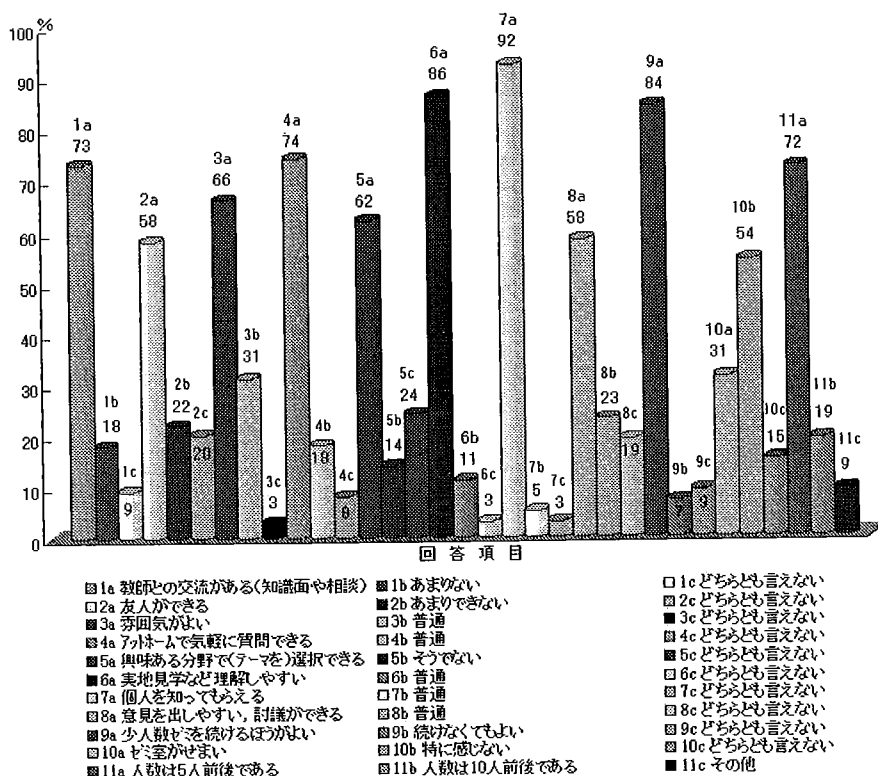


図3 教養学部生165名(2年次94+3年次71)対象のゼミに関する意見調査集計²⁾

し、この問題の多面的な重要性を筆者はよくわかっている。しかし、一方では教育の分野におけるパラダイム⁵⁾の一大変換とも云うべき少人数、双方向授業の明るい実態そのものに心を洗われる思いをも強くした。

一定の目標をもったゼミ活動をどの程度の期間で一区切りと考えるかについては、教員と学生とで大きな相違があるようだ。それは、2年次ゼミから3年次ゼミにかけて教員がゼミ計画（学生にとっては「研究テーマ」に関係したシラバスとなるもの）を《継続内容》に設定していたかどうか、および、学生が実際に研究室を移動しなかったかどうか等を調べてみればわかる。図3とは別のこの調査は、年度末近くで実施されている次年度履修のためのガイダンス用資料⁶⁾と事務記録とに基づいた。また関係者へのインタビュー等も参考にした。調査の結果は、教員の側で2年次から3年次へとシラバスの内容を実質的に引き継いで設定していた割合が68%、また、3年次から4年次にかけても同87%と大変な高率であった。しかし学生側では反対に2年次と3年次で、また3年次と4年次で、それぞれ同一教員のゼミを選択履修した学生の割合は非常に少なかった。ゼミ内容を実質的に2学年にまたがって発展・継続させている教員の意図は、おそらく、2年間（できれば3年間）自分のもとで一定の研さんを積んで自己の長所を発見し、万全の態勢で卒業論文に臨んでほしい……というものであったろう。これはある意味で教員の指導の“本気”と“やる気”を証しているものとも考えられ、決して悪いことではない。実際3～4年次で充実した研究を目指すという意図はよく理解できる。そのように考えている教員と、いろいろな体験をしてみたい学生との“ほどよい”関係を彷彿とさせる調査結果であった。

4. ま と め

この数年来、社会生活や企業活動における電子メールの利用の高まりは、電話以上に正確な日本語の使用を各人に求めつつある。言葉への関心の高まりは「日本語練習帳」⁷⁾の売れ行きのよさからも読みとれる。1年次（～2年次）における文章指導も含め、セミナー形式の少人数授業においては双方向型の授業を組み立てやすい。第一学生がそれを強く望んでいる。学生に対するアンケート調査結果からは、そのような形態の優位性がはっきり読みとれた。

一方、教員の思惑に反する学生の行動は一体何を意味するのか。多人数講義の落とし穴と同じような、教員から学生への一方通行があるのだろうか。これについて、図3は否定的であるようだが、最後に次のような分析を試みた。

本学1年次の教養ゼミで扱われている統一した内容には、いろいろなことが含まれている。教養ゼミにおいては、1年次生に講義やゼミを有効に利用するために必要となる知識を与えたり、日常生活の過ごし方に関する指導をしたりしても、それはやり過ぎというわけではない。大学生活を無難に出発させたいという教員の意図も働く。大学生活のミニマム基盤をしっかりと固めてからの「中間学年ゼミ」は、ある意味では教養学部特有のもので

ある。結果として学生が異なる分野を“渡り歩く”ことは、若さゆえの将来に対する見通しの“不確実さ”の反映にはかならない。しかし、多様な機会をもつことによって自己に最適の学問分野へ、または現役の研究者にとっても発展の行方は不確実の要素をなしとしない学際分野へと、意外な展開の眼を開かれることも起こりうる。これはまた、広範な可能性に価値を認める学部教育の目標とも合致している。そのため、個人の志望を出来るだけ生かす環境を設ける必要があるし、ゼミ室・実験実習室や研究室の機能を充実させる企画をする必要もあるだろう。元来中間学年ゼミというのは、専門研究への入門口における、自然選択重視の考え方の許可された場である。教員と学生との師弟関係に学生同士の交わりがうまく調和すれば、それらが社会性を培う上で良い方向に作用していくということが意義深い。この目的のために設けられた少人数単位のゼミという客観状況が優位に導かれているかどうかは、慎重な検討に値することなのだ。これまで論じてきた利点を生かすために、いろいろな方法が試みられてよいのである。

以上のような学部内の状況判断が、筆者たちのゼミだけでなく他の少人数構成の教育的活動に対していくらかでも考慮されることがあるとすれば幸いである。

謝辞

ゼミ選択に関する記録を参照させていただいたことに対して、植木利彦教室主任（当時）にお礼申し上げる。筆者の一人と部屋が隣り合わせの狩野勉学生部長からは、普段の何気ない会話の機会を通じて大学の現状認識に関する考察のためのヒントを得ているかもしれない。また、保管されていたガイダンス用資料を閲覧することができたのは、教養学部の平野正樹さんと田中邦江さんの両事務官による堅実なる実務のおかげである。

引用文献

- 1) 河野昌晴ほか「大学の教養教育に関する実態調査」委員会編：「大学の教養教育に関する実態調査」報告書（大学教育学会委嘱調査，1999年2月～3月実施）。
- 2) 山岡萬謙，山本健治：大学教育学会第21回大会発表要旨集録，pp.65-66，1999；本稿では筆者が直接たずさわった中から教養学部の事例をとり上げた。本学いずれの学部にも少人数構成に基づく教育的活動がある。他学部の事例は別の報告に譲りたい。
- 3) 教養学部で受講生から採ったアンケート調査に基づく集計（1999年5月）。
- 4) 大学教育学会第21回大会におけるシンポジウムⅠ，Ⅱ，Ⅲ（1999年6月5日～6日）。
- 5) T. クーン著（中山茂訳）：「科学革命の構造」みずず書房（1971）；この本で“パラダイム”は、主として科学的研究に対して『一定の期間，人々に問いかけと答えのモデルを与える，広く受け入れられた業績』という意味で用いられているが，筆者はそれをもっと広い意味に考えて用いた。
- 6) 倉敷芸術科学大学教養学部在学生のために編集された1999年度（次年度）の履修に関するガイダンス用資料。
- 7) 大野晋：日本語練習帳，岩波新書（1999）。

Evaluation of the Seminar with a Small Number of Students and a Teacher in the Middle Grades of College of Liberal Arts and Science

Kazunori YAMAOKA, Kenji YAMAMOTO*

Faculty of College of Liberal Arts and Science.

College of Science and Industrial Technology,*

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1999)

According to the questionnaire, seminars in various fields in the intermediate grades of *College of Liberal Arts and Science, Kurashiki University of Science and the Arts*, are clarified to be very active and effective. We consider that the positive reason depends on smooth communications, in daily campus life, from both sides of the students and the teacher to each other. That is why our students seem to be satisfied with the present educational system. Some other discussions are made about the effectiveness of such small seminars held in our college.